九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[書評]ジャン・パウル生誕250年の出版物

恒吉, 法海
九州大学大学院言語文化研究院 : 名誉教授 : ドイツ文学

https://hdl.handle.net/2324/1398590

出版情報：かいろす. 51, pp.134-138, 2013-12-01. かいろす同人
バージョン：
権利関係：

〔書評〕ジャン・パウル生誕250年の出版物

恒　吉　法　海

本年はジャン・パウル（1763-1825）の生誕250年ということでジャン・パウル関係の様々な本が出版されている。まだ入手していない本も多いが，博士論文の類いは別にして一般書を紹介しておきたい。

Beatrix Langner: *Jean Paul. Meister der zweiten Welt.* C. H. Beck. 2013

ジャン・パウル研究では聞かない名の著者であるが，ヘルダーリン等の著作のある作家らしい。本書の特色はジャン・パウルの生きた時代背景が詳しく記されていることである。日本であれば各藩の特色やお家騒動が大体周知のことなのであるが，そうした程度のことが分かるように記されていて有り難い。ただ作品の読みが若干粗い。例えば『見えないロッジ』でホッペディツェルが色付き水を飲ませて客人に酔ったふりを強いる場面があるが，ここは宗教の奇蹟よりも，〈振り〉の解釈が問題であろう（S. 158）。ジャン・パウルの初期風刺『グリーンランド訴訟』のタイトルの由来についてライプツィヒのレリーフを挙げて自信たっぷりに説明しているが（S. 82），他の大方の本は「グリーンランドでは訴訟は歌と踊りの風刺でなされる」というジャン・パウル自身の言を典拠としている。また『気球乗りジャンノッツォ』についてこの小品全体をライプゲーバーの自己対話と解しているが（S. 312），その否定はできないものの一般的には深読みに過ぎる。また Blumine は Flora（花の女神）のドイツ語化と思われるが（de Bruyn 1975, S. 341, Pfotenhauer 2013, S. 304），花の複数と解している（S. 421）。

Michael Zaremba: *Jean Paul. Dichter und Philosoph.* Böhlau. 2012. 2. Auflage.

この著者もジャン・パウル研究では聞かない。ヘルダー等の著書があるらしい。『グリーンランド訴訟』は売れなかったものの，書評はまずまず好評であったと記され（S. 78f.），『ヴッツ』は発表当時評判とならず，後の世紀に評判になったと記されている（S. 99）。ジャン・パウルの伝記ではジャン・パウルの兄弟に対する言及が少ないが，ジャン・パウルは冷淡であったのではなく，他の兄弟のできが悪すぎたのであるとされる（S. 147等）。コーブルクの小宮廷での騒動（S. 217），エマヌエルの財政援助（S. 204）等が印象的に記されている。ジャン・パウルは執筆の刺激としてビール等に頼っていたが，ありがちなことで度を過ごしマイン川に落ちたこともあったらしい（S. 252）。Zaremba はまずまずの伝記を書いていると思えるが，しかし『再生』の主人公ジャン・パウルをジーベンケースと取り違えていたり（S. 141），『生意気盛り』の Wina の父親を Klothar 伯爵としていたり（S. 180），Vult im „Siebenkäs“（S. 276）とい

う表現を見ると，ジャン・パウル研究者ではあり得ないミスで，ドイツ的厳密さはどこに行ったと言いたくなる。

Helmut Pfotenhauer: *Jean Paul. Das Leben als Schreiben*. Hanser. 2013

著者はジャン・パウル協会の会長を務めたヴュルツブルク大学教授で，先の二書のように初歩的ミスはなく，流石に流石という感じである。文献も明示してあり，ジャン・パウルの原稿も直接手にする立場にあって，ジャン・パウル研究の成果を十分に一般人に還元していると思われる。ジャン・パウルの基本的立場が死に対して執筆で対処し，生を文章で先取りする傾向にあって，常に諸作品の執筆計画，推敲計画を立てていたことが分かるように書かれている。ただこの基本線からはみ出すもの，具体的人間関係の確執には割合淡泊である。例えばコーブルクのお家騒動では，Langner はいかがわしい Kretschmann についてあれこれ論じて結局政治には善悪はないという立場（Langner, S. 383）で，Zaremba は改革派は常に抵抗にあうという立場（Zaremba, S. 217）であるが，Pfotenhauer は Kretschmann は「とんでもない嘘を付いている」というジャン・パウルの手紙を一応引用して，うんざりしてコーブルクから去ったと片付けている（S. 266）。また晩年のジャン・パウルの病に関して Zaremba はただ「糖尿病」と記しているが，Pfotenhauer はジャン・パウルのコレクターで医師の Philipp Hausser の言（S. 404）として紹介している。またジャン・パウルがゲーテに宛てて書いた二番目の手紙（4. Juni 1795）は大変難解であること（S. 140），更にゲーテはジャン・パウルに一度も返事を書いていないが，後にゲーテが著名人の手紙を求めに応じて売却したとき（1824年），ジャン・パウルの手紙（17. Juni 1795，４日の間違いか）も一緒で，ゲーテはこれらの手紙を貰って嬉しかった旨書いており，このときまだジャン・パウルは存命であり，ゲーテがただの一度でもジャン・パウルに手紙を書いていたら，ジャン・パウルは喜んだであろうと記されている（S. 163）。しかしこのような伝記が書かれ，この文が日本でも紹介されたことで，ジャン・パウルには十分であろう。

Bernhard Setzwein, Christian Thanhäuser: *Jean Paul von Adam bis Zucker*. Haymon. 2013

ABC 順にジャン・パウルに関連する表題の下，エッセイ風にジャン・パウルについて記したイラスト付きの本。読みやすくて，読者の好感を得ようとしている本であるが，いささか難もある。１）梅毒の例として，Beethoven, Nietzsche, Hölderlin を挙げている（S. 54）。ドイツでは俗にそう考えられているのだろうか。２）ヨーディッツの教会についての印象を次のように記している。„Doch von der anderen, der Kanzelaufstiegsseite her, wird man bei unserem Herrn eines völlig entblößten Hinterteils ansichtig, ein Skandalon, das mir noch in keiner anderen Kirche je untergekommen wäre.“（S. 104f.）。これは筆者

が藤瀬久美子氏との共訳で同学社から出版した Hermann Glaser, Johann Schrenk『ジャン・パウル　エッセンス』での29頁の写真のキャプションにすでに記されていることである。即ち,「ヨーディッツ教区教会の祭壇と説教壇。細部が珍しい。説教壇の天蓋のキリスト像は教会席からは赤い衣をまとっているようにしか見えない。説教壇に登るとき牧師が目にするのは全く裸のキリストである。(小さな写真参照) 写真J. Schrenk」。3) ジャン・パウルの晩年について最後の Zucker の項でこう記している。„Der Körper versucht, den überflüssigen Zucker auszuschwemmen, ein ebenso untrügliches Indiz, das auf Diabetes hindeutet, wie die schlechtende Erblindung, die Jean Paul gegen Ende seines Lebens heimsuchte. “ (S.252 f.) 最初これを読んだとき，目から鱗の感がしたが，Zaremba (S. 288)，Pfotenhauer (S. 404) を読むとすでに述べられていたことであり，巧みなコピペの感がしなくもない。しかし全体にさわやかな読後感が残るように計算されている。Grimm の辞書にはジャン・パウルからの引用が多いと記されているが，これも Pfotenhauer (S. 367) 等に記されている。

Ulrich Holbein: *Ein Chinese in Rom. Jean Paul und Goethe; ein untendenziöses Doppelporträt*. Haffmans & Tolkemitt. 2013

Setzwein の本が「上善如水」の本であるとすれば，Holbein の本は「上善如水」の Wein である。本書を読破するにはジャン・パウルの知識の他に該博な現代文学の知識を必要とする。従って筆者はまだ読み通していない。ジャン・パウルの研究書に時に現れるジャン・パウル風なあざといもので，暗示に富んでいる。イラストの合成写真を見るだけでもう十分な気がする。270頁の写真では，「19世紀では四賢人といえば，ゴータマ・ブッダ，孔子，ソクラテス，それにイマヌエル・カントであった」，271頁の写真では「20世紀では四賢人といえば，荘子，Maulana Dschelalledin Rumi，ベートーベン，ジャン・パウルであった」といった按配である。

語彙に関してはジャン・パウルは10万を超え，ゲーテは９万とされる。シェークスピアは４万で，ローマの古典作家は２万，新約聖書５千，今日の大学教授１万５千，ジョイスのユリシーズは６万とされる。(S. 56，及び Simon との共著の解説 S. 304f 参照)

また本年ジャン・パウル読本（抜粋）を二冊頂いた。筆者が1987年ボン大学に留学したときお世話になった Wölfel 教授と当時助手（現バーゼル大学）Simon 教授からのもので，筆者にとってはゲーテから本を贈られたかのように嬉しかった。これらの本に抜粋された部分は大方日本語で読めるので，日本の研究者としてはある程度責務を果たせたと思っている。以下の二冊である。

Kurt Wölfel: *Jean Paul. Das große Lesebuch*. Fischer. 2013

Ulrich Holbein und Ralf Simon: *Weltall im Krähwinkel. Ein Jean-Paul-Lesebuch*.

Lilienfeld Verlag. 2013

ヴェルフェル教授からお前も今年は大学でジャン・パウルの講演をするのだろうと尋ねられたが，いえ私の大学はジャン・パウルには何の興味も抱いていませんと正直に答えるわけにいかないので，ドイツの流儀にならって朗読会をすることにしよう。以下誌上でジャン・パウルの生誕250年を祝い，ことにHolbein氏の健筆を祈念して，ジャン・パウルの『ヘスペルス』から拙訳〈H Holbeins Bein〉の箇所をコピーし貼り付けジャン・パウル生誕250年記念祝賀朗読会のアリバイとする。（もっとも先のSetzweinの本では，Vorlesenの項でジャン・パウルの本は朗読に値するが，ジャン・パウル自身は朗読を嫌い，大方は「水」付きの現代の朗読会を嫌う筈だと書かれており，またすでにde Bruyn, 1975，S. 56が若きジャン・パウルの手紙をこう引用しているのである。「すべての教授が言いたいことは，本から一層良く，根本的に，時間と金を失わずに学ぶことが出来る」と。）

〈H

ホルバイン［Holbein］の脚。私はIよりもHをもう一度取り上げたい，Iの項目では傷病兵［Invaliden］がくるからである。これらについては次のように主張したい。肢体を奪われた人々は血気盛んとなるので，多くの手足を銃で奪われ，切除される程，パンは一層少なく与えるべきである，そしてこのことが戦費の生理学，食餌療法学の謂であると。── しかし奴さん達は哀れでならない。

ホルバインの脚は切除された脚よりももっと楽しい。画家はバーゼルではバーゼルそのものを塗るより他になかった。自分の天才をこの建築上の染色に費やさざるを得ない為に，天才はしばしば休憩を取らざるを得なかった──つまり驚くほど飲んだ。ある建築依頼主は名前は不詳だが，よく家の戸口にやって来て，足場に向かって，家のペンキ屋の脚が垂れ下がっている代わりに──それ以上画家の姿は見えなかったからであるが──隣の居酒屋に立ってふらついていると，がみがみ言った。その後ホルバインが路地を渡ってくると，雑言が彼を出迎えて，足場を登る彼の後を追いかけた。これは自分の習作を（酔っていても）愛している画家を憤慨させ，建築主の心を変えようと思い立たせた。つまり不幸の一切はすべて脚のせいで，その花綵装飾をこの男は足場の下に見たがっていたので，彼は決心して，自分の脚の第二版を作り，それを家に掛けながら塗ることにした，この男が家の戸口から見上げたとき，二本の脚とその靴は上の方で勤勉に塗っていると考えるようにとの配慮であった。──実際建築主はそう考えた。しかしとうとう，この仕掛けの脚が一日中一箇所にぶら下がって，先に進まないのに気付いて，なんで一つの所を長く修復修正しているのか大家は調べる気になり──自ら赴いた。真空（空っぽ）の上の方で彼は，画家が膝までの七分像が始まる所，膝の所で消滅していること，消えた胴体はまたアリバイを作って飲んでいること

を容易に見て取った。

建築主が足場の上で脚の作品から何の教訓も引き出さなかったのを私は遺憾に思わない。彼は怒りまくっていた。

私は更に，会議室の議長の背後に本人の代わりに賛否の為に下がっている侯爵の肖像画についての話をしたい――が関連を乱すことになる。それに以前はここで第一の小冊子は終わっていた。〉

拙訳『ヘスペルス』九州大学出版会1997年。219頁以下参照。